COLUMN

私の情報整理術 3

「自分について考えるツール —記憶する住宅，SmartWrite，SmartCalendar—」

美崎　薫
misaki-kaoru@u01.gate01.com

入った情報を使うまで ～整理のための整理はしない

情報にはさまざまなものがあり，何をどういう情報として受け止めるか，それをどう組み合わせて新しいものを作り出すか，総合的な全体像を見ながら，個別にどんなツールをどういう観点で着目して使うかを考えることが重要である．

道具は，それ自体で，使う人の思考を左右する強い影響力を持っている．道具を選ぶときには，左右された場合にも，結果を自覚的に捉えておく必要があるだろうし，納得できるものを選ぶ必要がある．

入ってきた情報を扱う方法はディジタル化

情報は，書物，対話やインタビュー，しぐさや表情，プレゼンテーション，環境，各種パッケージ，メール，Web ページなどの形で入ってくる．入ってきた時点で，どのような形であるかを選択することは不可能であるが，それを咀嚼しくり返し吟味する過程では，ディジタル化されていることは，想像以上に重要である．

書物の場合，最初に読むのには紙のほうが適していると考えられるが，読んだことによって思索を深め，新しい物事を作るためには，その書物を自らのうちに取り込む必要がある．

取り込むためには，単に読むだけでは不充分で，一部を抜き書きしたり，図示したりして考えを整理し，そのうえで自分の考えをつけ加えていく必要があるだろう．すなわち引用の必要が出てくるのだが，引用つまりコピーをするのには，紙にインクで作ったシミでは，あまりにも使い勝手が悪い．

紙には独特の質感があることはたしかで，質感＝物質性こそが本の持つ価値だという考え方もある．じつはディジタル化のいっぽうで，筆者はこちらにも与（くみ）しているが，それは情報整理の観点では主流ではない．物質としての本信仰は，愛書家としての筆者の側面の 1 つであるが，ここでは措（お）こう（**図 -1**）．

書物とディジタル

本を取り込む場合，文章は文字化するのがベストである．必要であれば，全文ディジタルであった方がよい．これを阻むものは著作権である．そこで，ごく一部の書物に関しては，全文を筆写している．筆者は生涯に 1 万冊程度の本を読んできたが，ベストブックといいきれる書物は，わずか 30 冊に満たない．

全文を筆写する必要を感じるのも，わずかこの程度なのだ．現に筆写したのは数冊だが，この数冊はほんとうに愛蔵しており，しばしば読み返している．もちろん，公開するものではないので，著作権の問題はない．

全文を筆写することによって，その作者の考えに近づくことができるのだ．たとえば安西水丸は文章が下手で，片岡義男はうまいことが分かった．

一部を引用する場合にも文字化している．筆者は，10 分間で 1,000 文字程度は入力できるタイピング能力を持つ．疲労や飽きもあるから，簡単に計算しても意味はないが，小説が 1 冊 400 字詰め原稿用紙で 400 枚程度だとすれば，26 時間くらいで 1 冊をテキスト化できる可能性がある．これは，OCR よりは作業としては意味がある．念のため，筆者は OCR はまったく使用していない．無駄な校正に時間をとられるばかりで，ぜんぜん意味がない．

入力には TRON キーボードと TRON かな配列を使っている．いわゆる親指シフトである TRON かなにはシフトミスがひんぱんに起きるという根本的な問題も多く，機械的にひんぱんに使うキーが壊れる問題もある．これを補うために，誤入力を含めて約 1 万語の単語登録をしている．たとえば「デジタルカメラ」と入力する場

図-1　書物ならではの魅力をもつ紙の本

図-2　特注のキーボードと机

合，入力する文字列が「でじぬるめがら」でもかまわない．キーの故障に関しては，キースイッチを 3,000 個入手しており，壊れたら（車のタイヤをローテーションするように）交換している．

文字入力する場合の問題は，書物の作者と筆者との，かな漢字の使い分けの違いである．すんなり入力できるのはよしもとばななの作品であるが，できない典型は山崎正和の旧かなの文章である．

道具は手入れをしながら使うものであり，よい道具には充分な投資をしてもかまわない．ちなみに TRON キーボードは，エルゴノミクスの観点ではベストに近いものであろう．一生ぶん，約 10 台を保有し，オーダーメードで作ったものもある．常用する書斎用には，体型にあわせて専用の机を作り，キーボードじたいも特注で革装している（**図 -2**）．

コミックは画像＋文字テキスト

文字化した情報は検索できるのでよいが，問題はコミックや図版の場合である．考え方は同様で，すべてスキャンしている．ベストと思われる数冊は，すべての台詞を文字化している．作業中のものが『KNOCK!』（川原由美子）．今後，『デビルマン』『バイオレンスジャック』（永井豪）『コブラ』（寺沢武一）『ポーの一族』（萩尾望都）を作業予定である．

文字化した情報は，BTRON では標準機能である実身／仮身を使ってハイパーテキスト化して格納している．画像じたいに埋め込むことも可能であるため，文字と画像が分離することがなく，文字で検索すると，画像を見つけることができる．この機能によって，「パラノイア」という単語が『KNOCK!』で 2 回使われていることを発見し，作品への理解を深めることができた．

将来は，このような手間をかけなくても，いつでも検索できる作品がディジタルファイルとして手に入る可能性がある．このような作業は無駄ではないか，と考える方もいるかもしれない．しかしながら，その可能性は可能性でしかなく，クリアすべき問題はあまりにも数多く，調整も難航するだろう．筆者の人生には間に合わない．手間こそが愛情だとすれば，好きなものに時間をかけてもかまわない．

この作業によって『コブラ』を深く読み込んだ結果，少なくとも 1 冊の本を書くことができた．どんなことも無駄ではない．

モードレスで編集可能なハイパーテキスト

残念ながら，身近にあるのは Web，つまり編集できないハイパーテキストである．Web を体験すると，ハイパーテキストじたいを過小評価してしまうような印象があるが，BTRON に実装されている実身／仮身は，常時 WYSIWYG の GUI で編集可能なハイパーテキストなのであって，彼我の差はきわめて大きい．編集モードを持たない BTRON は，道具の透明性が高い．しかし，筆者の観察によれば，ユーザの多くは道具の手順性に疑問を持たないようだ．

透明な道具を志向する筆者には，モードや手順や思考を疎外するメニューやアイコン，多数の確認パネルは，両腕を縛られたような拘束感を感じるのだが，感覚的なものなので，説得は不可能だと思っている．別に，他人を説得する必要などないけれど．

ちなみに BTRON では，ジョニー氏の NeXT ジェネレーションマクロおよび茨木高芳氏の仮身起動（自動保存対応版）によって，パネルを全廃することにほぼ成功した．無駄なオペレーションが減って，たいへんスマート

に操作できる．

確認なしで保存して終了するオペレーションをプロ向き，上級者向きというのであれば，筆者は上級者なのであるし，上級者と位置づけられて確認しなくてすむのであればそのほうがずっと都合がよい．

編集可能なハイパーテキストでは，いつでも思いついたときに，その場でコメントを書き加えていくことができる．コメントが増えるにつれて，あたかも過去の思考と対話しているような感覚に浸り，思考を深めることができたり，あるいは堂々巡りしていることに気づいたりする．そのような気づきこそが重要である．

ディジタル化した書物も，簡単に呼び出すことができるので，しばしば取り出しては眺めている．眺めることはなによりも重要だ．まずは情報をインプットしなければ先に進むことはできない．インプットするのは，単に記憶媒体にいれるのでは不充分であり，それを実際に見て聴いて体験することのほうに重点があるのはいうまでもない．

その場で編集できない場合，ちょっとコメントする，というような気持ちは萎えてしまうものだ．萎えて失われてしまうちょっとしたアイディアの断片をくみ取ることは重要である．とくに発想を大切にするのであれば．

全文検索とその先と

検索には，自身で仕様を策定し，豊福親信氏ほかの方々と共同で開発したデスクトップ全文検索ソフトである「明智君 neo」を使っている（**図 -3**）．明智君 neo は，ダイレクトオペレーションを最重要視した検索ソフトである．

Google やデスクトップ検索などによって，検索こそが最重要なのだ，と考えられるようになって久しいが，渡邊恵太氏の提示した「眺める」インタフェースは，検索の先にある概念であろう．それと検索をどうつなぐのか，課題はまだ多く可能性に満ちている．

SmartCalendar

写真や図形，書物などの「見たもの」は，上記のように，スキャンをしてディジタル化している．総数は，86 万枚を超えた．書籍でざっと 3,000 冊分程度はディジタルファイルになっている計算である．

BTRON では残念ながらこんな数のファイルを扱えない（上限が 65,000 に限られている）ので，上限なく画像をダイレクトオペレーションで扱えるソフトを，2004 年度の未踏ソフトウェアの支援を受けて開発した．

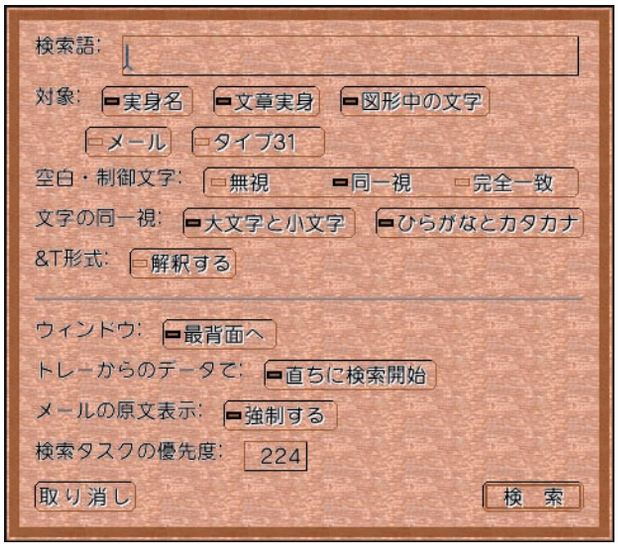

図-3　全文検索ソフト「明智君neo」

SmartCalendar である．

Windows 用の SmartCalendar(N) は，86 万枚を扱え，ダイレクトオペレーションで移動やコピーを行うことができ，ロスレスで JPEG を回転できるほか，写真を見ながらコメントを書くことも可能である．写真に対して行いたいと思う操作はすべてできる．

SmartCalendar(N) では，写真と合わせて音楽の再生も可能である．文字，写真，図形，音楽を一括して扱えるソフトを筆者はほかに知らない（**図 -4 ～図 -7**）．

ディジタル化した本と，物質としての書物のままの本とで最も異なるのは，ディジタル化した書物の扱いやすさである．ページをめくる，検索する，活用する．どの手順をとっても紙の比ではない．最も強く感じたのは，紙の書物はしばしば死蔵することである．死蔵した本は，活用されていない．

音楽とデータベース

SmartCalendar は，日時ベースの情報整理を提案しているわけだが，それは人間にとっての情報の軸はいくつかしかなく，日時は強力なキーとなる，と考えたためである．日時のほかの軸は，人名や人の顔，項目，位置／場所などである．これらを扱う方法について，現時点ではよい解決策は見当たらない．

具体的には，音楽は，アーティスト＝人が重要であると考えられるが，これを取り込むためにはデータベースが必要であろう．iTunes でデータベースが整備されていると考える向きもあるかもしれないが，少なくとも筆者が使った限りでは，既存のデータベースの大半は，ほんとうに使うのには不足している．

図-4　写真にコメントを入れることができる

図-6　1日モードでは写真が時刻にマッピングされる

図-5　1か月の写真を一覧できる

図-7　1日の写真をランダムに表示して楽しめる

曲名の表記方法なども確定していないため，たかだか5,000曲程度を入れただけでも，大幅な手直しをしなければ使えない事態に直面している．

曲名が英語の場合，全角／半角／カタカナ表記などが混在していて，修正なしには使い物にならない．歌手名も名字と名前のあいだにスペースがあるだけで別人扱いされる始末で，ここには検索とデータのせめぎ合いの歴史がまったく反映されていないと嘆息する．

歌詞に至ってはぼろぼろで，沢田研二の『追憶』で「白いばら」という歌詞が「赤いばら」になっている例を目にした．シュールである．考証せずには実用にならないどころではない．

データベース作成をつかさどる司書的存在がいないのだろうか．司書がいたとしても，ダブリン・コアを参照する限りでは，ユーザの実用に供するものができるとはとうてい思えないが．いないよりはマシか．

透明な道具が架空であるように，間然するところがないデータベースもイデア的な存在であろう．座して待っても，状況は改善されないことはたしかだ．今後このジャンルには，深くコミットしようと考える．

SmartWrite

情報整理をする上では，メモを取り扱うことも重要だ．マイクロソフトのOneNoteや2005年11月にリリースされたインクデスクトップなど，関連ソフトは無数に近いが，いずれもメモを長期にわたって使い続けることを想定していないと考えざるを得なかった．ソフトがなければ読めもしないメモをとってどうするのだ？この点でも，筆者がSmartCalendarと同時に開発したSmartWriteは優れている．

SmartWriteは見ることを想定してメモをとるソフトである（**図-8**）．見るアプリケーションは，SmartCalendarがターゲットである（**図-9**）．OneNote

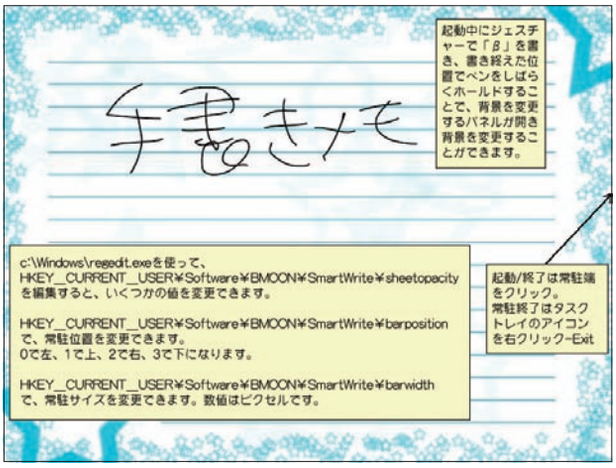

図-8　SmartWriteで書かれたメモ

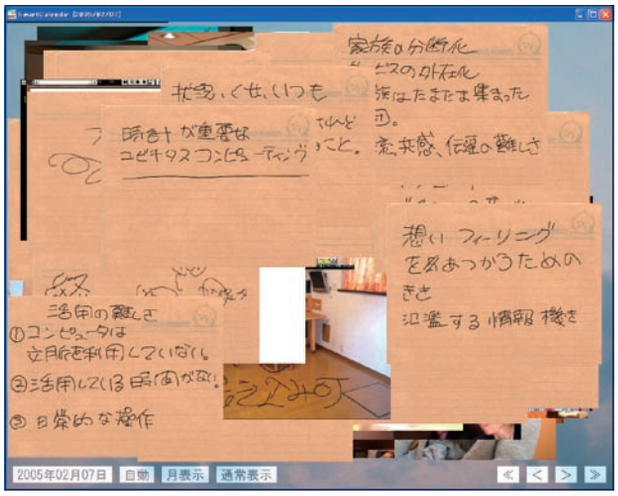

図-9　SmartWriteで書いたメモをSmartCalenderで見ている

もインクデスクトップもメモをとることに焦点があり，とったメモを活用することを考えていない．インクデスクトップはほとんど最悪で，項目を挙げれば次のようになる．

（1）メニューがあり，メニューの上には当然ながら書けない．
（2）メニューがあるので複雑．
（3）なにより最悪なのは，画面に落書きできるので，1 枚しか保存できず，
（4）それを別ファイルとして保存する場合には，コピーしてペーストして，保存作業をしなければならない．

比較のために SmartWrite の特徴を対比して列挙する．

（1）紙を模倣するためメニューはない．
（2）メニューはないので，ダイレクトオペレーションで紙のように書ける．キーボードからの入力も常時受け付け，モードがない．
（3）ページはいくらでも増やせる．
（4）保存作業は自動で行われる．紙には保存操作はない．

動画，映像は情報量が厖大で，残念ながら現時点でコンピュータで扱うのにはなじまない．あと 10 年程度で記憶媒体の問題がクリアされれば，SmartCalendar を拡張して動画を扱えるようにできるだろう．

以上のように，ハードウェアからソフトウェアまで，筆者の身の回りにあるのはほとんどすべてオーダーメードの手作り作品だけである．環境を整えた結果，思ったことを即座に見つけ出し，正確に引用しつつ情報と対話して，新しい情報を作り出すことがシームレスでシンプルに行えるようになってきた．価値観を共有できた多くの方々に感謝しつつ，本稿を終えたい．

（平成 17 年 11 月 21 日受付）